男らしさの文化のポリティクス

――一つの社会地理学にむけて――

ピーター・ジャクソン*
（丹羽 弘一** 訳）

Peter JACKSON
The Cultural Politics of Masculinity:
Towards a Social Geography
Transaction. Institute of British Geographers, N.S. 16, 1991, pp.199-213.
© 1997 by the Institute of British Geographers

要約　本稿は、文化のポリティクスの概念に依拠しつつ、男女間のジェンダー・アイデンティティの文化的構築を、特にそれらの歴史的および地理的な特殊性に注目しつつ探究する。ここでは、家父長制的なジェンダー関係が、本来的に搾取の対象である女性のみならず、一部の男性（同性あるいは異性愛者）をも同様に抑圧している状況について検討する。本稿は「支配的」（もしくは主導的）な男らしさと、「追順的」（従属的）な女らしさとの強い適合にも関わらず、男らしさと女らしさの多様性を、ジェンダーにおける差異の表現の選択を通して理解できることをみいだす。男らしさの新たなあり方が、フェミニズムおよびゲイによる政治的活動の要求によって生じたかとも思われる一方、明らかとなっているのは、男女間の権力の均衡における動的な移行よりもむしろ家父長制的な構造への抵抗である。本稿は、Bradford における最近の調査の結果を提供する。さらに男らしさの支配的な形式を支える空間構造に関する今後の研究課題と、可能的な抵抗の方針の指示をもって結論とする。

キーワード：男らしさ、文化のポリティクス、ジェンダー関係、空間構造

はじめに

最近、フェミニズムの異議申し立て、および程度の違いはあれ、ますます政治化したゲイの意識への対応として、男らしさについて多くの関心がみられる。これらの動きは、どちらも男らしさの支配的形式が持つ、経済的搾取および社会的抑圧の本質を明らかにしてきた。抑圧の形式は女性の身体および生殖権の家父長制的な支配から、家庭生活、女らしさや強いられた異性愛のイデオロギーを経て、労働の価値に対する社会的定義、技術の性質と「生産的」および「再生産的」労働に対する報酬の差異に至るまで多様なものである[1]。フェミニストとゲイの権利闘争は、権力の不平等性を現代のジェンダー関係の中心的事実として認識する規範的な枠組みを提供してきた（Connell, 1987）[2]。それらはまた、男女間の権力の不均衡を正すための政治的課題を明らかにしてきたものでもあり、これらの課題は私も共有するものである。

地理学は家父長制的なジェンダー関係に対する、独自のフェミニストの立場からの批判を生み出しつつあり（WGSG, 1984; Momsen and Townsend, 1987; Little et al.,

＊　ユニバーシティ・カレッジ（ロンドン）
＊＊　富山大学

1988)、またセクシュアリティの地理的側面を検討したいくつかの研究もある（Castells, 1983; Lauria and Knopp, 1985)。しかしこれらの文献の中には、男性主権の家父長制的な僭取の変化を求め、より解放された、非抑圧的な男らしさの形式を受け入れようとする男性のため

の手引きはほとんどみられない。一般的にこのような男性にとっては、フェミニストの要求に対して支持を表明することのほうが、男性としての私たち自身の経験の持つ矛盾のために行動するよりもむしろ容易なのである[3]。

フェミニズムは学問的課題と同様、政治的課題をともなうものである。女性が家庭あるいは職場において、日常的な抑圧に面している場合、その個人は最も直接的かつ強いられたあり方で政治的なのである。男性にとって家父長制的な抑圧の本質は、女性に比べ明白なものではなく、したがって政治的課題の明瞭な表現はより困難なのである。（強いられた異性愛のような）家父長制のいくつかの側面が、（同性愛）男性のいくつかの集団に対し明らかに抑圧的である一方、（男性主権という一般的仮定のような）他の側面は実際より矛盾したものである。男性が権力を自発的に放棄し、一般的な政治的活動をつくりだす期待はほとんどないと思われる[4]。私たちは「抑圧の性」（Hearn, 1987）とのつながりによって、私たち自身を理論的にも政治的にも非常に曖昧な立場に置いている。異性愛の男性は、家父長制的な抑圧に対する抵抗し政治的に組織された他のグループ（フェミニスト、メンズ・ゲイ、およびレズビアン）と、単に協力すべきなのだろうか。また異性愛の男性は、「ジェンダーとジェンダー・ポリティクスに興味と関心をもつ男性にとって、ふさわしい焦点が私たち男性自身である」というような独自の課題を持つこともないのだろうか(Hearn and Morgan, 1989, p. 7)。私はこれらのうち後者の立場に自分自身を置こうとしている。なぜなら私は以下のように論ずる人々に同意しようとするものだからである。「私たちが挑んでいるのは単なる理論的なつながりではなく、男性としていかに生活し関係しあうかということなのである。変えられなければならないのは私たちの男性としての経験であり、男性としての関係性なのである」(Saidler, 1989, p. 5)。

男性と男らしさに関する文献は政治的優先権を明確にするにはあまり役立たない（まるで男性自身がそうであるように？)。なぜなら政治的および経済的生活における男女間の不平等をあつかうというよりも、男性のセクシュアリティに関する偏見にとらわれているからである（例えば Metcall and Humphries, 1980; Pleck and Sawyer, 1980 を見よ)。それゆえ本稿を執筆するにあたってはフェミニストの文献のほうが、心理学的な力点と、意識向上、カウンセリングおよび心理療法のための処方をともなった、その強力な政治的方向性と社会変化への言及のため、「男性研究」の文献よりもしばしばより有用であった。しかし、男性と男らしさの問題を扱うに際しての、フェミニストおよび「男性研究」文献の貢献を論評することから始めるよりも、むしろ最近の社会および文化地理学の再考において主要になってきた、文化研究の学際的な分野に依拠するところからはじめたい（Cosgrove and Jackson, 1987; Jackson, 1989)。

文化のポリティクス

文化のポリティクスの中心的概念によって文化研究は、分析の心理分析的および社会学的形式を結びつける可能性を提供する。ジェンダー関係およびアイデンティティの研究への試みとしての、文化研究の魅力はそれゆえ明白である。文化のポリティクスはそのなかで意味が構築され、取り決められ、そこで支配と従属の関係が明らかにされ競合される領域として定義されうる。文化のポリティクスの概念は、抽象的な「意味の地図」から、具体的な社会的実践と空間形態におけるそれらの意味の客体化にいたる「生活の全側面」という、文化の広い定義を必要とする(Hall and Henderson, 1977, p. 10)。エリートの知的、芸術的産物という文化に対する単一的な考え方に対し、文化のポリティクスは支配的であると同様に従属的、エリートと同様に大衆的、黒人であるとともに白人、同性愛者であるとともに異性愛者といった多義性を主張する。この考え方にしたがって、私は男らしさの一様な単一の様式を仮定するよりむしろ、不安定と矛盾をともなう男らしさの多義性に言及する[5]。この多義性が文化のポリティクスに、ラディカルな鋭さを与えるのである。このラディカルな鋭さは、支配と従属の複雑な様式によって性格づけられた社会的関係の網の目のなかで、階層的

に位置づけられた文化をともなう。

文化研究の文献もイデオロギーと、それらが提供する物質的な関心に対する文化的実践に関わる、社会と文化の不可分性を主張する（Wiliams, 1958）。この唯物論的視点から、文化は経済的かつ政治的矛盾が儀式として表われ、象徴的に解決される領域として明らかになる。文化はその政治的かつ経済的決定因に還元されえないが、しかし自由に浮遊するはかないものとしても扱われるべきではない。最近 David Harvey が論じたように、文化的変容の物質的（歴史的および地理的）基盤は存在するが、しかしその明確な因果関係の複雑な経路を表現することは決して容易なものではない。文化的なるものと政治的なるものとの関係は、しばしば私が曖昧でとらえどころのないものとしてみいだす「関係的自立」という概念によって表現される。ここで唱導されている選択肢は、イデオロギー的なるものと物質的なるもの、文化的なるものと政治的なるものが分離した領域ではなく、異なった時間と場所において様々な度合いに変化する単一のフィールドとしてみなしつつ、これらの明白な交差を探究することなのである。文化的なるものは政治的なのだ。

文化研究の文献を読むさいに、誰もが空間的メタファーの急増を感じざるをえない。文化のポリティクスは一連の「争われる地勢」、「象徴的空間」および「通り抜けられる領域」を占め、「好みの地図学」を定義し、「意味の地図」と「想像の地理学」を用いる。これらの領域性は明白である。これが Soja（1989）が論ずるように、「社会理論における空間の再主張」とよぶべきことであるかどうかは議論の対象となるであろう。しかしこれは単なる便利な言い回しにとどまるものではない。なぜなら私は多様な「男らしさの地理学」を考察することを通して、このことを示したいと思うからである。

文化のポリティクスが男らしさと、それらの多様な形式と微妙な矛盾に対するいくつかの新しい洞察を提供する一方、その主題は単一の論文のなかで取り扱うにはあまりにも広範で複雑である。それゆえ私は男らしさが社会的に構築され、文化的に区別される程度を説明しつつ、男らしさが歴史的かつ地理的にとる形式の多様性に注目する。私はそのような多くの男らしさが、現在メディアをはじめいたるところにおいていかに表現されているのかという問題を考察する。さらに既存の家父長制的構造のなかで完成しえた、男らしさの支配的な形態が限定的にしか変化していないことを強調する。最後に私は男らしさの地理的な変異（しかしながらそれらも現在十分に調査されてはいないが）という観点のみならず、男らしさの既存の形式を支え、それらの変革の可能性を明らかにする空間構造といった点からも「ジェンダーの地理学」を考察したい。

男らしさの社会的構築

文化のポリティクスは以上概説したように、差異の社会的構築と政治的重要性に関心をもっている。それゆえまず私たちは、両性によって取り入れられているであろう、ジェンダー・アイデンティティが場所と時間によって異なるという多様性をもつものであることを認めねばならない。私たちは私たち自身よりも他者の、男らしさと女らしさの形式に対して共感的にならねばならない。私たちは異性愛者と同様にメンズ・ゲイとレズビアン、黒人と白人、若者と老人の主体性に気づかねばならない。しかしながら私たちは私たち自身について語らず、他者についてのみ語るという罠を避けねばならない。なぜなら Victor Seidler（1989）が論ずるように、私たちは幼年時代から感情や気分をあらわにするやり方で私たち自身について語ることから徐々に遠ざけられてきた。つまり男性になることを学ぶということはむしろ、中立的で公平だと考えられている理性の言葉によって、他者について語ることを学ぶということをしばしば含んでいるからである。多様なジェンダー・アイデンティティを認めるということは、男らしさと女らしさがまったく任意のあり方でかたちづくられるということや、個人の気まぐれで変化するということを意味しているのではない。ジェンダー・アイデンティティは誕生以来、子どもが社会的に認められた男らしさと女らしさの様式へと型にはめられてゆくにつれ形成されてゆく。しかし幼年時代がジェンダー・アイデンティティの形成にとって、極めて重要な時期であることは確かではあるが、男らしさと女らしさは、生涯を通じて形成され、再形成されている。さらにそれらは日常的基盤のもとで確認され、取り決められ、修正されているのである。ジェンダー・アイデンティティの主意主義者的モデルは、男性と女性の社会的構築における潜在意識の影響力についての

心理学的議論によって、また男らしさの特定のありかたが、歴史的に実質的な主導権をたもってきたという社会学的な論拠によって容易に矛盾に陥る。なぜなら男らしさの社会的構築は、Lynne Segal (1990) が想起させるように、強いられたセクシャリティのもとになされるからである。

主導権をにぎる男らしさは女性たちの従属と同様、男性たちの結束にもとづいた「男性支配の自明性」を確立する。このことは、そこからあらゆる社会的結論が導きだされ主張される、男性と女性の間にある本来的な生物学的差異に関する本質主義者の観念に起原している。Arthur Brittan は家父長制（あるいは「男性主義」）のイデオロギーという点から、この過程を記述している。

> 男性主義は男性と女性の間の基本的な差異を自明化し、異性愛が正常であると仮定し、疑いなく性的分業を受け入れ、そして公的および私的側面における男性の政治的かつ支配的役割を容認する。
>
> (Brittan, 1989, p. 4)

ある社会的に認知された男らしさの形式に特権を与える一方、他の形式は暗黙のうちに下位に置かれる。それらの排他的な異性愛の強要によって、例えば支配的な男らしさは同性愛および両性愛的な実践に様々な制裁を課し、それらにともなう生活様式を周縁化し、メンズ・ゲイとレズビアンを「逸脱」した危険なものとして扱う (Rich, 1980)。私は支配的な男らしさが、感情の自己抑制、知的合理性および性的なふるまいといった、男性主義者の理念にしたがおうとしない異性愛男性を抑圧していることも論じておきたい。男性が全体として、男性が支配権をもつ家父長制的前提から、なんらかのありかたで利益を受けているにせよ、それらの前提は他の選択の可能性を制限しうるのである。Cynthia Cockburn が論じているように「…私たちの文化は、女性を傷つけるのと同じほど彼らを醜くし、害するジェンダー・アイデンティティの担い手として、（男性を）様々な度合いでひどく抑圧している」(Cockburn, 1988, pp. 316-317)。私たちは男性と女性に対する家父長制的なジェンダー規定がもたらす相関的な犠牲に対する、Cockburn の評価に異議を唱えるべきかもしれないが（なぜなら異性愛の男性は、男らしさの支配的なありかたに追従することによって、社会的地位と経済力というかたちで報酬を受けるが、異性愛の女性はそうではないゆえに）、一方そのような追従が、多くの男性に対して深刻な抑圧であるという一般的な点も否定しえないのである。

この議論を発展させて Jeff Heam (1987) は、権力関係の不平等がジェンダーとセクシャリティの両方の点から表現される、「階層的異性愛」の様式について言及している。階層的異性愛の様式は、例えば個々の女らしさの構築と同様、様々なかたちで従属させられる男らしさとの関係のなかで構築される。主導的な（支配的な）男らしさと追従的な（従属的な）女らしさの補完性に、特に強力な影響を及ぼしている何かがある[6]。男性が賃金雇用の世界の外に女性を因習的に価値づけている属性（もろさ、傷つきやすさ、優しさ）は、彼女たちを「未熟練」な、貧しい手間賃仕事に追いやる際に用いられる。この経済的従属の報いとして、男性は女らしいサインを見せる女性を保護するように奨励された。しかしながら従順な女らしさが公然と見せびらかされることに対し、防御と甘やかしの大げさな見栄をもって報いることは、騎士道は女嫌いのもう一つの見かけではないということわざを単に確認することである (Millett, 1977)。

この議論を抽象的に追究するよりもむしろ、しかしながらいくつかの事例が、ジェンダー・アイデンティティが歴史的かつ地理的に特殊性をもつ程度を確認しつつ、男らしさのアイデンティティの多様性と移行しつつあるそれらの社会的境界を説明するのに役だつであろう。

男らしさの表現

まず最初に軍隊による二つの広告を考察しよう。一つは第一次大戦当時の合衆国海軍による新兵募集のポスターであり、もう一つは 1984 年の英国陸軍による広告である。合衆国海軍のポスター（図 1）はすべての「勇猛な」アメリカの男性を、彼らの国の軍務に就かせるために、露骨な性的アピールを打出している。「男になれ、そして行動せよ」。このポスターは、女性は軍に募集されてはいたが、まだ前線における戦闘に関わることからは免除されていた時代に、ジェンダーによる役割が変わりゆく期待を戯れに用いつつ、いくつかの視覚的および言葉による語呂合わせを作りだ

図 1 Howard Chandly Christy, 世界第一次大戦、ポスター。(Dover Publications Ink.)

している。下士官の制服を着て微笑んでいるこの女性には、実際の戦争の恐怖よりも映画産業の因習をほのめかしているアイロニーが暗示されている。

男性に中心的な役割を託すという確立したジェンダーの慣習からあまりかけはなれていないとはいえ、二つ目のイメージ（図 2）はより複雑である。ここではしかしながら二つの微妙に異なった男らしさの解釈が、互いに身構えた若い男性として対置されている。どちらの男性も元気で健康に見え、そしてふたりとも今どきの普段着を身に付けている。しかし視覚的にも言葉のうえでもこの宣伝は、軍隊は右側のより下町風の若干だらしない服装の若者ではなく、前屈みではなく直立し、きちんとした普段着を着た（非常によくアイロンをかけられたズボンとともに）左側の男性にのみ興味をいだいていることを明らかにしている。細部に至ってはより明解である。一人の髪は丁寧に櫛でとかされ、もう一人の髪は乱れている。一人はトレーナーを着（アウトドア・スポーツへの健康的な趣味を暗示している）、もう一人はあまり頑丈そうでない隙間の多いサンダルを履いている。文章は「あなた自身の心とそれとともに行くボトル（肉体的勇気）」を持つことの重要性を強調する、対照的な男らしさのイメージを支持している。「厳しい訓練」への望みはひじ掛け椅子の安楽さと都合よく対照させられ、武装した戦闘の規律と不屈さは殴りあいの不規律性とくらべられる。重要なことはほんの 20 年前でさえ、これらどちらのイメージも、軍隊生活にふさわしいとは考えられてはこなかったであろうことである。フォークランド紛争後のブリテン島において、反抗と服従のイメージは知覚的に鋭く変化してきた。（同様のイメージは、スキンヘッド、麻薬中毒者そしてフットボール・フーリガンによって、対立するイメージが提供される、最近の警察官募集の印刷物においても用いられている）。

これらの競合する「男らしさのモデル」（O'Shaughnessy, 1985）が、現代の労働者階級の若者の表現に限られたものではないことは、容易に説明できる。Leonore Davidoff による英国の貴族社会に関する歴史的業績は、有用な素材に満ちている。彼女の『*The Best Circles*』（1973）における記述は、例えば、どのように英国の貴族社会が「上流社会」の物質的および象徴的報酬に対する権利を調節する手の込んだ作法のきまりを用いていたのか、どのようにこれらの礼儀作法のモデルが慎重に区別された性的役割とともに、ジェンダー・セグリゲーションの厳格な様式を強いていたのかということを生き生きと描写している。性的分業は、ポロやビリヤードといった他のスポーツが男性のみに限られていた一方、アーチェリー、ゴルフそしてクロケットが女性のための娯楽として許されいたスポーツの領域でさえ適合する。

Leonore Davidoff と Catherine Hall も、18 世紀後期および 19 世紀初期の英国における、中流階級の男性と女性の生活について手本とすべき討論を提供する。彼らは「男も女もなし、汝らは皆キリスト・イエスにありて一体なり」（ガラテア人への手紙、2 章の 28 節）と公然と述べるキリスト教のイデオロギーにしたがった、男らしさと女らしさの大変特殊な構築の論拠を提供する。Davidoff と Hall は男性の宗教的参加が低下し、また女性は男性よりも宗教を受け入れやすかったという広く抱かれている信念にも関わらず、どのように男性が教会と礼拝堂における権力の座を保っていたのかということを明らかにする。これらの矛盾は男性と女性を分離した領域に隔てる等しく几帳面なセグリゲーションと結合した、男らしさと女らしさの大変不安定

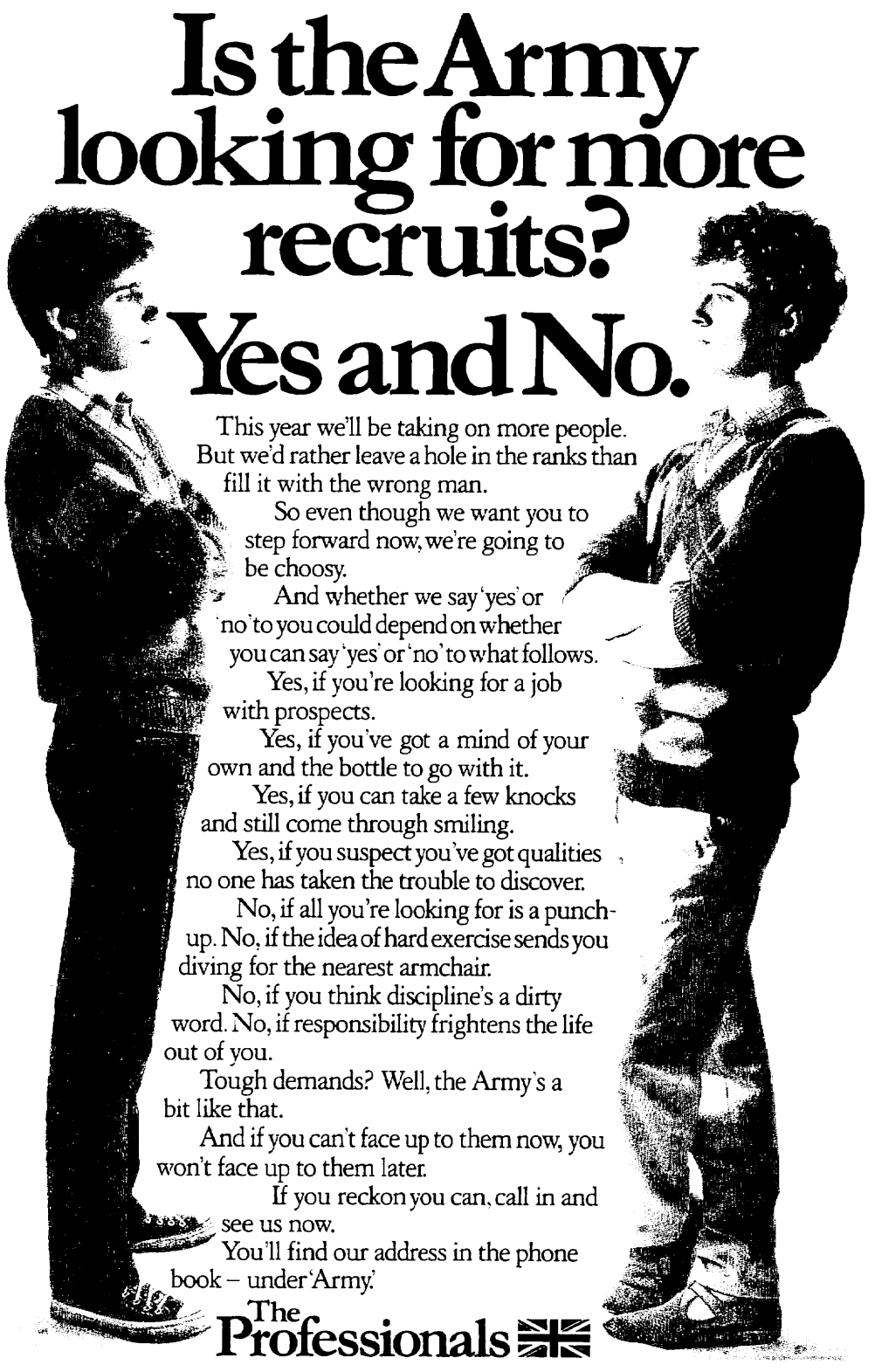

図2 英国陸軍新兵募集広告、1984 (Army Careers)

な定義によって解決される。

支配的な男らしさの諸矛盾は宗教的な教訓と、彼らの階級的位置づけにふさわしいより世界的な価値観との均衡を探究した福音主義者たちの間に特に感じられた。キリスト者の価値観は、弱者とよるべないものの需要に対する責務を通して表現される、道徳的まじめさと愛の力に対する信念を要求する。しかし上流社会のメンバーとしての真の雄々しさは、狩り、乗馬、飲酒そして「乱交」といった、スポーツおよび軍隊の武勇にもとづいている。道徳的および宗教的価値観は、明らかに政治的および物質的な有利さの追究と矛盾する。18 世紀を通じ、それゆえ聖職者は彼らの家庭生活の美徳の擁護と、「男らしい決定と決断」を評価する、礼拝に集まる会衆に対する彼らの権威を危うくするかもしれない、家庭への過剰な愛情の表れとの間の細い道を歩んだ (Davidoff and Hall, 1987, p. 118)。聖職者たちは彼らのもつ「思いやりの深い感受性」と「ほとんど女性的な慈悲」(p. 110) によって尊ばれ、ウェバーリー小説やリッチ大聖堂をはじめて見たときの感動にも涙を流すことができた。後になってのみ、19 世紀にキリスト教のより「男らしい」解釈が、英国の公立学校の厳格さと関連した、男らしさのたくましいモデルをともなって現れた[7]。

男らしさの社会的構築が、歴史と同様に地理を持つことは 19 世紀カナダにおける素材によってうまく証明されている。Peter Ward (1990) は、どのように求婚、愛情、結婚が、男性と女性を「隔てられた領域」に割り当てる複雑な社会的境界を交差して行なわれるかを明らかにした。

> 19 世紀の英領カナダは、それぞれの性に隔たれた領域を与えていた。男性はある労働、権力、連合の世界に、女性はまた別の世界に出入りした。両性の経済的、家庭におけるそして市民としての役割は、彼らの社会的領域と結びついていた。男性の領域は戦場、仕事場、居酒屋そして市民としての業務をとりまき、女性のそれは家、庭、家庭そして教会を含んでいた。大部分は相互に排他的であったが、しばしばこれらの空間は重なりあっていた。
>
> (Ward, 1990, p. 64)

もし Ward がしばしば少々無批判的にこれらの区別を受け入れているとするならば、どのように両性の間の境界が社会的階層によって変化するのか (階層が高くなるほどそれは厳格になる)、どのようにそれらが都市化が進行するペースに合わせ、19 世紀の間に変移していったのかということを有効に説明している。彼はまた、どのように男性と女性が、彼／女ら自身の都合のいいように、彼／女らの間にある中性的な立場と同様、彼／女ら自身の領域を利用していたのかということを明らかにしつつ、結婚市場の構造を記述している。

> …都市の未婚男性は、いろいろな所で求愛したが、田園地域の未婚男性と同様、多かれ少なかれ、思うままに歩き回ることができた…女性の場所はより限られていた。家が彼女の基本的な空間であり、彼女はそこを彼女のものとして要求した。
>
> (Ward, 1990, p. 80)

男性と女性のための異なった活動範囲は、男性については「…地域社会の周りを動き回り、多くの公的かつ家庭的な設定のもとで女性に出会う」が、一方女性はより動きにくく「…彼女たち自身の社会空間に彼らを引きこ」むという異なった方策を要求した (Ward, 1990, p. 80)。

明らかに、まったく異なった男らしさのモデルが、異なった時と異なった場所において、優勢であった。私たちは英国とカナダの家庭的な領域という範囲を越えることによって、さらにこのことを論証することができる。Bruce Kapfer による、オーストラリアとスリランカの社会の大胆な比較、「Legend of people, myth of state」(1987)は、オーストラリアの国家アイデンティティを決定するさい、鍵となる役割を演じた 1915 年の Gallipoli キャンペーンの毎年の祝賀会における、男らしさの中心性を描くことによって豊富な資料の源を提供している。Gallipoli への上陸を記録にとどめるなかで、オーストラリアの歴史は、彼らが耐えることを強いられた大変恐ろしい状況のなかで、兵士たちを支えるには、愛国心と忠誠では十分ではないことを示した。より重要なことは、ある有名な歴史学者が主張するように、「男性自身の勇気」であった。

> 彼の戦友が彼の力強さに身をゆだねようとしているときに、屈してしまうような男性にとって、戦列が、全軍が、そして同盟の主張が彼に忍耐を要求しているときに、それができないような男性にとって、…これらのことはそのような男性が直面しえぬ期待であった。命はとても尊

いものであるが、オーストラリアの男であるという理念の真実を証明できないのならば、その命は生きるに値しなかった。

(C. E. W. Bean, quoted in Kapfear, 1987, p. 123)

オーストラリアの「友情」はこのような状況のもとに生まれ、今日では大量のビールの消費をはじめとした、あらゆるイデオロギー的に重要な社会的実践をともなう、戦没者追悼記念日の儀式において讃えられる。Kapfear によれば、アンザック兵のために飲酒することは単なる友情のあかしではなく、イデオロギー的な意味をもっている。「飲んでも乱れない」ことは、あなた自身を、そしてあなた自身の男らしさを支配することなのだ。「酒に弱い者」は男とはいえない。友情は回し飲みをする（あるいは大声を出して）共同的飲酒を通して実践され、そこで男たちが男であるということを、大量のビールを飲み、お互いに遅れをとらないことによって証明するのである[8]。

より家庭に近いところでは例えば、Cynthia Cockburn による印刷業における男性の結束に関する研究（Cockburn, 1983）、もしくは「どのように労働者階級の子どもは、労働者階級の仕事を得るのか」という Paul Willis による分析（Willis, 1977, 1979）に注目してもよいだろう。しかしどちらの研究も、広い意味で「経済的な」枠組に焦点を置き、Cockburn がいう「男性の権力の物的基盤」（Cockburn, 1981）を取り扱うものである。私が援用しようとしている文化のポリティクスの分野は、その特徴として、性的差異の文化的表象のなかに生じる矛盾と複雑さにより関心をもつものである[9]。ここにも「経済的」領域に劣らず、男性とは何かという多くの定義に対するポリティクスがある。

表象のポリティクス

例えば男らしさと、「人種」との交差を考えてみよう。「人種」は同性エロチックな欲望の性的な搾取の動機の強力な混合物をともなう、白人の熟視の対照としての黒人男性によって常に表象される。Rovert Mapplethone による黒人男性の裸体写真は、支配的な社会の同性愛嫌悪と人種主義にもとづく矛盾した感情を、とてもよくとらえている。Isaac Julien の最近の映画、『*Looking for Langston*』（1989）もハーレム・ルネサンスの詩人、Langston Hughes の生涯を描くことによって、また同時に同性エロチックな欲望の本質についての疑問を提起することによって、同様に観客に対し複雑な要求を喚起させている。しかしこれらの論点は洗練された芸術に純粋に限られるものではなく、広告とメディア表現の世界にも溢れ出している。Daley Thompson は例えば最近、Lucozade の一連のテレビおよび野外広告において、黒人英国人スポーツマンの運動競技のトルソーを取り上げた。彼の力強い汗ばんだ肉体は、性的なエネルギーと男性的な力に満ちた、黒人男性のより精力的で活動的なイメージをともなう作品を胸に刻み込むのを助けた。黒人スポーツマンとの視覚的な一体感は、作品に新しい命と商業的魅力を与え、以前の病室への連想（少なくとも私の幼年時代にはあった）から解き放つのに役立った。同様に Paul Gilroy が明らかにしたように、Frank Bruno のボクシングのリングにおける苦難に耐えた勝利は、再構築された英国らしさのイコン、「Know What I Mean, Harry ?」（Gilloy, 1989）[10]として現れた。

男らしさの表象のポリティクスにおける、特に興味深い例は、大道具方の Karl Phillips の半裸の肉体を取り上げた、最近の「English National Opera」のポスター（図 3）にかかわるものである。このポスターは、それが受けたメディアの注目の量によって、ENO の「noted for the company we keep」キャンペーンにおいて、最も成功を収めたものと判断された。このポスターは、ロンドン地下鉄のプラットホームにおける無数の話題となったのはもちろん、『*Evening Standard*』誌（1989 年 9 月 5 日）と『*Observer*』誌（1989 年 9 月 17 日）の記事の題目にもなった。しかし私たちはどのようにこのイメージを解釈するのだろうか？ モデルのドレッドヘアーや、例えば彼がもたれている傾いた柱にどんな意味を結びつけるのだろうか。以前どこで私たちはこのような容貌を見たことがあるだろうか？ どのようにこのポスターは異なった観衆（男性と女性、同性愛者と異性愛者）にアピールするのだろうか？ そしてなぜ London Coliseum は、オペラの広告としてこの独特なイメージを選んだのであろうか？

部分的な答えは、Paul Lewis（1985）が以前論じたように、同性愛的エロチックの裏の世界から（異性愛的）主流へとじょじょに変化してきた「台座の上の男性像」の描写と、このイメージとを関係づけコンテクスト化させることによって与えられうる。男性の裸体

図 3 English National Opera 広告、1989(London Coliseum)、写真：John Stoddart

は、一時は隠れた同性愛の読者を目的とした、スポーツのたそがれた世界と肉体的な健康の雑誌に限られていた。後に古典文化の支持と異国情緒――弓と矢、円柱、一対の羽根――と関連して、それは芸術の雰囲気を帯びてきた。さらに後になり、男性美の肉体的な理想化は、『*Physical idealism and the art of posing*』(1930) といった出版物に表れ、ファシストの宣伝において鍵となる役割を果たした[11]。アンダーグラウンドのイメージは明らかに長く複雑な歴史をもち、男性の肉体の図像学は容易に「肉体のポリティクス」と分離させることができない。おそらくまた私たちは、排他的な異性愛を主張する人々の間で複雑な多くは理解されていない役割を果たしている、同性愛エロチシズムの両義的なポリティクスを扱っているのではなかろうか。なぜならこの広告が引き出そうとしているものは、性的実践と性的幻想の間に、あからさまな表現と隠された欲望との間にある、支配的な男らしさのなかのこの両意性にほかならないからである。同様のパラドックスは、以前の支配的な男らしさと関係を断ったように見える一方、他の点ではそれらを追認したにすぎない新しく表れた男らしさの中にも見られる。「新しい男性」の完全な分析はまだ早かろうが、そのような新しい男らしさのモデルが、社会的にも空間的にも、極めて特殊だという提議を含んだ、いくつかの予備的な批評はおそらくあえて行なってもよいであろう。

「新しい男性」の神話

「新しい男性」という発想は、女性運動と同性愛者の権利に対する行動主義に対応した、1980年代および1990年代の間の男らしさの新しい形式の出現に関係している。Andrew Tolson (1977) は、男性のセクシュアリティに対する「フェミニストの挑戦」が男性の集団の形成をみちびいた、バーミンガムにおけるこの時代の彼自身の苦痛に満ちた経験を記述している。

> 私たちは女性の独立に賛成していたが、それに脅かされてもいた。私たちは私たちの攻撃的な役割を放棄したかったが、それに縛られていることも感じていた。私たちは論争とつまらない口論に疲れていたが、それを止める力もなかった。私たちはたとえ統一したセクシュアリティを探していたにしても、私たちはまだ「演じる」ことを――そして演じている自らを見つめ続けることを強いられているように感じていた。
>
> (Tolson, 1977, p. 138)

最近のメディアが過剰に宣伝している「新しい男性」は、Tolsonによって描かれている傷つきやすさ、自問、感じやすさとはほとんど関係がない。対照的に「新しい男性」はすべてのこのような疑念に、まったく悩まされてはいないように見える。彼は彼の男らしさに快活な自信をもち、彼の子どもたちと時間を過ごすことを好み、彼のパートナーに対し家にいることや、明らかに彼自身よりも低い地位の仕事をもつことを強要せず、競争的でなく、優しくそして面倒見がよく、彼は彼自身の買物、洗濯、アイロンがけさえやり、彼の料理の水準で彼のパートナーを感心させることに余念がない。彼は「新しい男性」がライフスタイル広告の最近の創案、市場における新しいニッチの発見とほとんど変わらないものだという疑念ゆえに、整髪剤と彼の雰囲気にあうふさわしい普段着を選び、自分の風采に多くの時間を費やし、いくつかの初めての話題を提供する。なぜなら「新しい男性」は『*GQ*』(Gentleman's

Quarterly）のような雑誌によってもたらされ、教育されるものであり、以前に『*Cosmopolitan*』のようなニューウエイブの女性誌によって開拓されたのと同じほど大きな潜在的市場であるからである[12]。

一般的な注意を逃れてきたように思われる「新しい男性」の一側面は、このような男らしさの新しい様式が高度に場所的に特殊であるという点である。Frank Mort（1988）は男性のスタイルと大衆文化に関する刺激的なエッセイのなかで、このことを書き留めている。都市地理学へのじれったい言及とともに、彼は空間が新しい男らしさの社会関係にとって、すぐれて背景以上のものであることを論じている。

> 空間は私たち自身について持っているアイデンティティと感覚をかたちづくる、社会的意味を保ち続けている。若い男性（そして若い女性）にとって、新しい外的人格が生み出されるのは、大通りであり、クラブ、酒場、レストランのなかであり、テラスといった、都市景観における空間と場所である。あたかも彼らは異なった空間的な状態において、異なった自分自身を表現し、異なった気分を持ち、まったくばらばらにされたアイデンティティを生きているように思われる。
>
> (Mort, 1988, pp. 218-219)

しかし私たちは「空間と場所」、「景観」そして「空間的状況」といった、これらすべての言及に心を奪われる前に、「新しい男性」に関するすべての最近の誇大広告の虚構性を思い出した方がよい。『*GQ*』のような雑誌のすべての広告が確証するように、ジェンダー関係における変容は皮相的なものに過ぎないだろう。多くのフェミニストにとっても、「新しい男性」は、単なる「すぐれた詐欺者」なのである（Chapman, 1988）[13]。

むしろ評価することが困難なのは、新しい「男性研究」のカリキュラムが、フェミニズムの盛り上がりに対する学術的な反応として、多くの北アメリカの大学において盛んになった「女性研究」のプログラムに匹敵するものなのかどうなのかということである（Brod, 1987）。「男性研究」は抑圧的でない男らしさのかたちを探究するなかで、自分自身とお互いの個性とライフスタイルを厳密に調べることを男性に求める、ラディカルな緊張をもたらすだろう。しかしそのような集団やプログラムは、男性権力の基盤を問うたり、女性とフェミニズムに対しより支持的な態度を受け入れることに、男性を常に導いてきたわけではなかった。しばしばジェンダー研究学科における職を、男性が女性と競合するという状況さえもたらされるような、逆のことが起こりうる。そのような理由で「男性研究」の学術的な分野は、厳しい批判を受けてきた（例えばCanan and Griffin, 1989を見よ）。「男性研究」はまた、心理分析に興味をもち、受け入れうる選択である男性に、その有効性が限定されるという点でも批判されうる。それは階級、そして「人種」的に特有であり、この形式においては少なくとも、それを生み出す大学の環境を越える機会はほとんどない。

男らしさの地図を作る：社会地理学の課題

ここまでに私はただ、多様な「男らしさの地理学」に、それらの歴史的かつ地域的特殊性に、そしてジェンダー・アイデンティティの個々の形式を支える空間構造にふれてきたのみである。地理学が常に男性支配的な職業であり続けてきた限り、そこには引用すべき豊富な学問的文献はない。ほとんどの自然および社会科学と同様、地理学はその主題がジェンダー化されているという事実に、限られた注意しか払ってこなかった。その事実を認めてきた人々でさえ、地理学者は行動の特殊な様式がどちらの性の一員にも変わりなく結びつくといった本質主義的な仮定、つまりある者が肉体的に男性ならば、彼の行動は肉体的に女性である者とまったく異なるものになるというように考える立場をしばしばとってきた。しかしLynne Segal（1990, p. 211）が想起させるように、単なるペニスの物理的存在にもとづいた、男性に共通する経験について推測できることには限界がある。ジェンダー・アイデンティティはしっかりと性的身体に刻み込まれているにも関わらず、セックスとジェンダーの区別はより特定し難いものなのである。

フェミニストはセックスの生物学上の「事実」と社会的に構築されたジェンダーの間の、つまり女性のみがこどもを生むことができる（彼女たちの生物学上のセックスゆえに）一方、子育てと女性との習慣的な関係はジェンダーの社会的因習の結果と考えられてきたという便利な区別を行なってきた（WGSG, 1984）。この単純な区分は、ジェンダーの地理学にとって重要な意味を持つフェミニストの学問に対する、最近のいく

つかの貢献によって異議を唱えられてきた。Bob Connell は例えば、男らしさの身体へのはめ込みは、何年もの期間をかけて達成される長くて複雑な社会的過程であり、生物学上のというよりも歴史的な事実であることを示した（Connell, 1983）。Alison Jaggar は、そのもとに「文化」が機能する原初的「自然」は存在せず、しかし私たちの生物学上の、そして社会的自己は相互構築的であり、セックスとジェンダーは弁証法的な相互関係にあり、一方が無ければ他方は考えられえないと論じ、この点を発展させている（Jaggar, 1984）。Joan Cocks はさらに、「男性的」もしくは「女性的」なものとして一般的に考えられている肉体的な性質は、少なくとも理論的には、どちらの性の個人にも得られる資質と関係しており、いったん「男性的な自己が静的な制御の厳格な立場から逃れたら」男らしさと女らしさの因習的なカテゴリーは瓦解すると論じて、セックスとジェンダーの因習的な区別の「退化と消滅」に貢献している（Cocks, 1989, p. 170）。彼女は男らしさと女らしさの単純な二分法に反して、男性と女性が支配的なジェンダー体制に対してとると思われる多くの態度、体制支持者、変わり者、批評家、裏切り者そして反逆者を同定している（Cocks, 1989）。すべてあまりにも頻繁に、しかしながら Paul Connerton（1989, p. 104）が指摘するように、まさしくその言葉の曖昧さを考慮することなく、私たちは「身体の社会的構築」に言及している。セックスや「人種」のような、見たところ自然的カテゴリーとされるものの社会的構築についての議論が、自然を社会的に構築されたものとして考えることの、広範囲にわたる意味を認識しはじめてきた地理学者によってなされるべきことは驚くべきことではない（Fitzsimmons, 1989）。しかし私たちのジェンダー・アイデンティティとジェンダー関係の定式化にとって、どのように私たちが私たちの人生を生きているかということにとって、このような議論がもつ意味は、ほとんどかつて取り上げられてはこなかった。

いったんセックスの自然主義的および二分方的考え方を棄ててしまえば、私たちはそれらを通じてジェンダーの区別が「自然」に見えるようになる、多くの社会的、文化的そして政治的過程のすべてを自由に考察できるようになる。West Yorkshire の繊物工業における労働の「人種化」についての、私の最近の調査から、適切な一事例を取り上げさせていただきたい[14]。調査はある一つの工場、Lister's of Manningham の個人的な記録（Keighley, 1989）と、Bradford Heritage Recording Unit によって集められた口承資料を用い、戦後の Bradford に焦点をあてた。1950 年代まで Lister の労働力は、主に南欧および東欧からの様々な「民族」集団からなる白人および女性であった。戦後、厳しい労働力不足は、Mangla ダムの建設が多くの小作農を彼らの土地から立ち退かせているパキスタンの Mirpur 地区からの直接雇用を含む、さらに遠くからの雇用を経営者に強いた。どのように Lister's は、主に白人と女性からなる労働力から、多くは黒人と男性からなる労働力への転換に対処するのだろうか。

その過程は、血族関係の結びつきによって組織され、パキスタンにおける家庭生活の家父長制的構造（Saifullah Khan, 1974）を反映した、移民それ自体の内的な力学を含む複雑なものである。しかしそれは明らかにジェンダーと「人種」の、多様な構築も含んでいる。以前は彼女たちの「すばやい指先」のために女性のものとされていた仕事が、今や移民男性の「手先の器用さ」と関係づけられるようになった。労働はまだ「未熟練」と分類されていたが、「人種的」劣等のイデオロギーは、報酬の水準への同様な影響とともに、「女性労働」の本質に関する家父長制的前提にとって変わった。「人種化」の過程では、一世紀に及ぶ植民地搾取の間に作り上げられ、雇用者たちに人種化した労働の搾取を正当化するために動員されうるイメージの蓄積を植え付けた、Edward Said がよぶ「想像の地理学」が利用された。雇用者はパキスタン男性を、「横柄」で「不器用な」ジャマイカ人と都合よく比較しながら、「働き者」、「従順」かつ「すばやい」と記述しているが、しかしながら彼らは「パキスタン人はまったく使えなくて、彼らは働かず秩序を守らない」とも主張しえた（Allen et al., 1977, pp. 104-105）。「人種」とジェンダーのイメージは、頻繁に交換しうる。ある経営者が主張したように、「パキスタン人は地元の人々より、女性のような小さな手をもち、彼らは小さなフレームを扱うのにむいていた。あなたが糸紡ぎや機織りのためにすばやい手を必要としているなら、女性とアジア人はおあつらえむきだ」（Fevre, 1984, pp. 110-111）。人種主義者の典型は、もともと「自然」なものとして合理化される。

パキスタン人は（インディアンよりも）よりのろい——

> あなたは今まで、彼らの後ろを歩いたことがあるだろうか？ 彼らの普通の生活ペースはとてものろく、それは工場でも同じである…アジア人はこつこつ働くので、そのような人材を必要とするところに彼らをおくがいい。（彼らは）鋤を押すのには、あまりにのろすぎた。
>
> (Fevre, 1984, pp. 112-115)

雇用者たちは彼らの議論がしばしば矛盾していたという事実に困惑しておらず、他の人々が若いパキスタン人は「仕事に対する態度という点でよりよくない…（彼らの親たちよりも）反抗的だ」といった不平を述べている一方、何人かの人々は「若いパキスタン人は彼らの父親たちよりもよい」という理由で「第二世代の」労働者を好んでいる（Fevle, 1984, p. 22）。しかしながら矛盾したことに人種主義者のイデオロギーは、従属的な労働力を維持するのには効果的だった。選ばれた役人たちは、「すばやい指先」に対する織物工業の需要に悩まされつつ、同様の立場に賛同していた。

> 当時その私たちが雇用していた人々は、中欧の国々から来た男性であった。われわれはこの早い段階では女性を雇用していなかったが、糸紡ぎは男性にとって簡単な仕事ではなかった。御存知のようにあなたはすばやい指先を必要としており、そして後に、アジア人を雇用し、アジアの男性、彼らの指は中欧人の指先よりも確かにすばやかった。
>
> (Lady Mayoress, Bradford HeritageRecording Unit, oral history A0044/01/015-6)

Lister の労働力の転換において重要なことは、労働契約と国家の規則に支えられた、隔離された交替労働の手段によって、（黒人）男性が（白人）女性から隔てられていた、時間的かつ空間的隔離の過程であった。この慣習が、女性労働者がこのことを好んだ――「少女たちは彼らを好まない…自分たちは女同士の楽しさを守るべきだ」という理由で正当化さていたにも関わらず――「人種」とジェンダーによる労働力分離の効果は、明らかに経営にとって有利に働いた。

これは「人種化された」男性の集団への、あるジェンダー化された性格（すばやい指先）の帰属をめぐって生じた、社会的に構築された男らしさの具体的結果のまさに一例である。同様の過程はどこでも観察されてきた（例えば Johnston, 1989）。ジェンダーの社会地理学を築きあげる際の仕事の一つは、それゆえ、実際に歴史的かつ地理的に特殊な、男らしさのかたちの構築の「地図」を描くことである。このような多様性の詳述は学術的な目的と同様、潜在的な闘争の方針を明らかにする、政治的な目的をもっている。もし歴史地理学者が、女性は「歴史から隠蔽」されてきたという事実につい最近気づいた（Rose and Ogborn, 1988）のならば、男性の男性としての経験もまだほとんど扱われてはいない。

しかし現代のジェンダー関係を支え強化し、変化が可能であろう政治的圧迫点を提起する空間構造という点から地図化されるべき、もう一つの「ジェンダーの地理学」がある。Linda McDowell and Dreen Massey（1984）は、4 つの異なる労働市場における階層とジェンダーとの異なった交差を探究しつつ、「女性労働」の事例のなかでそのような議論の輪郭を素描した。同様の試みは、どのように異なった労働のコンテクストが、男性に彼自身を概念化するさいに影響を与えるかを記述することによって、異なった男らしさの事例においてなされてもよかろう。この課題はここで詳細に扱うにはあまりも広範にわたるが、二つの提起がここでは適切だろう。

フェミニストは「私的」および「公的」空間の間の、ジェンダー化した区別に付与される重要性を長く認識してきた。しかしジェンダー関係一般に対してこの区別がもつ含みと同様、男らしさの異なったモデルに対してもこの区別は含みをもっている。例えば同性愛男性が「カミングアウト」と、自らのセクシャリティをよりおおやけに目立つようにすることに与える政治的な意味を考えてみよう。このことは分離した同性愛者の空間（サンフランシスコの「同性愛者ゲット一」、Castro 街のような）の発達のみならず、より効率的なネットワーク（特にエイズの流行によって必要となったような、「安全なセックス」の奨励についての）形成の手段も許す。公的および私的空間の分離は、同意した成人の間の私的な同性愛セックスは許可し続ける一方、広くおおやけに同性愛を助長することを禁じる、1988 年の地方行政条令における、忌まわしい第 28 条のような、同性愛についての行政立法の中にも位置づけられてきた。皮肉にも、エイズの流行と第 28 条に関する議論は、もちろん一部において同性愛嫌悪の程度を増してきた一方、同性愛者の共同体の政治化の増進をも導いてきた。Jeffrey Weeks が言明するように、エイズの衝撃と道徳的正当の復活にも関わらず、「私

たちは永久に地図の上にいる」(Segal, 1990, p. 164 から引用)——私が思うに、これは偶然の一致以上のメタファーなのである。

他の例は、そのような事例の圧倒的多数が、異性愛者の男性と若い女性に関係しているにも関わらず、頻繁にそして不当にも同性愛男性にむけられる、児童の性的虐待に関するおおやけの関心の高まりを含んでいるだろう。そのような状況は私的家庭の「尊厳」によって公的な視線からさえぎられている、核家族内の隠された暴力の程度によって生じえることは少なくない(Valentine, 1989)。

明らかに男らしさについての地理学的研究は初期段階にあるが、いくつかの確かな方法は、ジェンダー意識と変化への献身という点でより進んだ水準にある、他の社会科学者によって探究されてきた。Bob Connell (1987) は、それぞれが対応する空間的領域と関連する政治的緊張をもつ、多様な「ジェンダー体制」——家庭・国家・路上——を同定するという、有益な出発点を提供している。Kobena Mercer and Isaac Julien (1988) は、私たちの性的および人種的アイデンティティは、多様に重なりあった領域で構築され、私たちはそれらの特殊なコンテクストのなかでのみ政治的にそれらを変化させることができると論じつつ、より特殊な事例を記述する。彼/女らは、このことは「異なった社会集団に帰属する男性と女性が、彼/女らの人種的かつ社会的アイデンティティの相互的な構築のなかで入り交じる、スポーツ、メディア、音楽、そしてダンスといった日常的な闘争の場に、より大きな注意を払う事だと提起した (Mercer and Julien, 1988, p. 102)。

Cynthia Cockburn の印刷業界における男性の結束に関する業績 (Cockburn, 1983) は、もう一つの研究の方向を提起する。彼女は念入りな加入の儀式、徒弟制度、そして父から息子への技術の伝授によって補強される、男性の結束と女性の排除を定義する結合組織(教会の神父たち、同業組合など)のまさしく専門用語における独自の「言説の世界」の発達を明らかにする。新たな技術の進歩さえ、男性よりもはるかに多くの女性がコンピュータのキーボードを操作する技術をもっていたにもかかわらず、排他的な男性の領分としての印刷労働の社会的定義が残り続けるのを妨げられなかった[15]。

最後に男性的なアイデンティティを支え、家父長制的なジェンダー関係を維持する空間構造を議論するさいに、私たちはある領域における権力が他の領域のなかにあふれ出る程度について意識しておかねばならない。つまり家庭における男性の権威は例えば、多くの部分で、日中における彼らの不在に依っているのである。男性による賃金雇用の喪失は、したがって彼らの暮らしと同様彼らが男であることを脅かすものとして経験されるのである[16]。分野の相互浸透にも関わらず、今のところは男らしさの一般的な危機はなく、「方向は変わるかもしれない、それから構造的な変化が起こりはじめる」(Connell, 1983 p. 31) 一連の局地的危機があるのみである。

結論

文化のポリティクスの概念に依拠しつつ、本稿ではジェンダーの地理学に対する試みの新たなありかたを、とりわけ特有の男らしさの文化的構築に関連させて提起した。もし「男らしさ」と「女らしさ」が、歴史的な時間と場所に特有な構築物であり、引き続いて強化され、論じられ、再編され、再確認されるものであれば、それらの持つ異なった解釈と移行する境界をめぐる取り決めと変化に関わる空間を同定することも可能であろう (Davidoff and Hall, 1987)。フェミニズムとゲイのポリティクスが、実際、男らしさの支配的な形式——それを核戦争と公害から強姦、近親相姦、ハイヒールに至るまで全てに帰しつつ——を「病理的なものとしてきた」(Chapman, 1988, p. 226) 一方、本稿は「新しい男性」によって生じた関心の多くが、誇張されたものであったことを提起した。もし男らしさの新たな形式が、最近の政治的かつ経済的な激変の結果として生じてきたものなのであれば、文化的唯物論者の視点からすれば、これは予期されたはずのものにすぎない。男らしさが具体化するあり方、どの様に男性的な主体性が形成され経験されるのか、そしてそれらが変えられうる範囲に関わる性的なポリティクスの課題に、新たな疑問が加えられたことは確かである。しかし、男らしさのこれらの新しい形式が、権力の性的な均衡におけるなんらかの主要な移行を示すよりも、既存の家父長制的な構造の中に、それらの回復力と多様性を強化しつつ、あっけなく容易に収まってしまったのではないかという疑いは残る。

男らしさと女らしさの伝統的な様式は、ジェンダー・アイデンティティーとジェンダー関係の変化によって、時間的に崩壊してきたと思われる。しかし、このことは私たちを、男女間の持続する権力の不均衡の過小評価に導くべきものではない。まさしく、熟練化した「鋳造活字」の技術に代わるコンピューター化された活字組みに順応し、作業が前進的に非熟練労働化してゆくにつれ生産過程を向上させていった Cynthia Cockburn の研究における印刷労働者（Cockborn, 1983）のように、伝統的なジェンダー関係もまた、社会的状況の変化と関係しつつ変化し始めたのである。しかし、これらの分析が、男らしさのポリティクスに対して示唆するものは何であろうか？ 一方では、それは、男性による自発的な権力の放棄をめぐる、政治的活動を基盤としようとすることの限界を再確認するものである。他方では、それは「人種」、階級、ジェンダーおよびセクシュアリティといった用語で定義される基本的な力の不釣合いに、政治的関心を再び向けさせることに役立つものである。

とりわけ男らしさの多様性を認識することは、多様な抵抗を可能にする。既に問いかけたことだが、私たちはどのように、Connell（1983）らが研究した男らしさの「局地的危機」の上に、新たなものを創りあげるべきなのだろうか？ 抵抗の想像力に関する彼女の最近の研究の中で、Joan Cocks は次のように提起している。つまり、「長期間を費やすような闘いはなぜ抵抗が生じねばならないのかということの批判的な理解を経て、目的の継続、努力の調和、彼ら自身の活動以外の何かにより多く参与している当該地域の一部の人々に対する感覚、規則の非遵守のみならずそれに対する活発な反対を必要とする」（Cocks, 1989, p. 217）。もし私たちが変化の、しかしながらゆっくりとした可能性に関する楽観主義のこの感覚を共有すべきならば（Segal, 1990）、私たちは男らしさの観念に内在する様々な不安定と矛盾を探しだし、男らしさの支配的な形式を支持し維持している空間構造をあばく、一致した努力を続けてゆくべきである。

謝辞

本論文のもととなった論稿は、1990 年のグラスゴーでの IBG の定期大会において、Eleonore Kofman によって企画された、「ジェンダーと場所の文化的構築」についての WGSG の研究会において提出された。草稿に対して的確な論評を下さったことについて、Liz Bondi、Jacquelin Burgess、Sarah Whatmore、Peter Wood、そして三人の匿名のレフェリーに対し、私はお礼を申上げたい。本稿における図については、版権所有者の許可のもとに用いさせていただいた。

注

1) 男性の主権の程度も女性に対する組織的暴力にもとづいており、それゆえそのような暴力が男らしさの特殊な形式として説明されうる程度も激しく議論されてきた（Segal, 1989 およびその後の通信をみよ）。

2) 私は権力の問題について、男性の多くがフェミニズムが彼らに帰する権力をもたないと論じる、David Cohen のような著者と最も意見を異にする。Cohen は男性が、「主導権をとる」ことを強いられていることによって、弱い立場に置かれていると主張する。「女性に言い寄ること」、彼が論じるには、「フェミニズムが仮定していると思われる権力の…単なる実践ではない」（Cohen, 1990, p. 31）。しかし彼の性的エチケットのモデルは、男性支配のコンテクストのなかにかたく位置付けられている。このことがこの特殊な領域において、男性に圧力をかけているという議論は、男性と女性の間の一般的な不平等に対峙するものだとは私には思われない。

3) 私がここで依って立つ立場は、男性はフェミニストにはなれないが、フェミニズムを女性の運動として考え、女性の自主性を尊重し、平等な権利のためにフェミニストの要求を支持すべきだと主張する、Jon Snodgrass のそれと同じものである。

4) この小論は、家父長制の打倒は、究極的には女性と同様男性の利害にもとづくものであることを主張することを試みている。しかし Connel（1983, p. 32）は、そのような変容の初期段階は、彼らの明白な支持を集めるよりも、男性からの厳しい抵抗を引き起こしがちだということを、確かに正しく認知している。

5) Lenne Segal の最近の業績の長所の一つは、「男らしさ」それ自体ではなく、一連の特殊な男らしさの説明にある（Segal, 1990）。Joan Cocks はフェミニズムと政治理論に関する最近の研究のなかで、同様の多様性を認めている（Cocks, 1989）。

6) 男らしさと女らしさが一つの全体の、矛盾した内的な側面であることを私たちに気づかせ、女性的なるもの自体に対する男性的なるものの陽の構成を強調し、「男性的なるもの／女性的なるもの」の単一体制として、Joan Cocks が記述するのがこの様式である（1989, p. 223）。

7) 19 世紀について Mangin and Walvin の著書（1987）は、転換期にある少年たちが「人格のある男仲間」に加わるのを助けた『*Scouting For Boys*』を著した、Baden Powell に関す

る二つの章を含む、多くの啓発的な素材を提供している。

8) 第二次世界大戦の前夜の Bolton における観察にもとづいた、英国における飲酒パターンとの、いくつかの洞察に満ちた比較が、『*The pub and the people*』(1943) という世論調査から得ることができる。国家アイデンティティの形成とはより明らかには関連していない一方、パブ生活はジェンダーと階級の境界線にそった社会的および空間的セグリゲーションに対する、広範な社会的関心を映し出していた。民営および公営のバー、パブの個室、ラウンジ、そして上流むけのバーの急増は、大変微妙な社会的変化に対する英国の強迫観念を異様に暗示する。

9) エスノグラフィにおけるポリティクスと詩学に関する最近の文献が、性的差異の表象をほとんど含んでいないのは驚くべきことである。『*Writing cultures*』にフェミニストの展望がないということを論じつつ、例えばJames Cliford は、文化的表象におけるジェンダーについての系統だった疑念が広まってきたのは、ほんの過去 10 年ほど以前からであると主張している (Clifford, 1986, p. 18)。明白なフェミニスト人類学の登場については、特に Rosald and Lamphere (1974)、Ardener (1981) および Moore (1988) を見よ。

10) Frank Bruno の快活なキャッチフレーズは、ボクシング解説者、Harry Carpenter との一連のインタビューのなかで生み出されてきた。Gilroy (1989) は、敗北のなかでさえ、Saluman Rushdie によって人格化された、奥義に達した学者的なイメージをを拒否する一方、チャンピオン、Bruno に対する黒人の男らしさの力強い解釈を、白人に許した現代英国の人種主義の独特な分極化について言及している。

11) ファシズムと独自の肉体的表現との同定は、Klaus Theweleit の影響力をもった論稿、「Male fantasies」(1987) のなかで探究されている。

12) 『*Gentleman's Quarterly*』は 1990 年の 1 月から月間で出版されている。この雑誌は英国版と米国版に別れ、5 万部以上の発行部数をもっている。『*The Independent*』誌 (1990 年 1 月 10 日) とのインタビューのなかで、この雑誌の英国版の編集者である Paul Keers は、どのように彼が与えられた仕事 (この雑誌に、その米国版よりも決然とした異性愛的魅力を与えること) に打込んでいるのかを述べている。

13) Polly Toynbee は早くも 1987 年 4 月に、『*The Gardian*』誌において、「決していなかった男性」として「新しい男性」について述べている (Segal, 1990, p. 36 から引用)。Angela Phillips は「いたわりあい、分けあう男性の 10 年間」になると期待された 1980 年代の終わりに、同様の失望を記載している (『*The Listener*』誌 1990 年 1 月 18 日)。

14) この調査は、非常に定評がある Nuffield 基金によって与えられた資金を用いた。

15) Rosemary Pringle (1988) は事務雇用におけるコンピューター技術と、(男性の) 管理職と (女性の) 秘書という伝統的なジェンダー役割にそれらが及ぼす影響との、同時的発達をたどっている。確立した階級組織を転倒させるどころか、ワード・プロセッサーやそれに関係した革新は、ただ既存の権力関係に挿入され、さらに男性の権力と管理を強めた。

16) 同様に Lynne Segal は次のようなことを示唆している。男性の無力の経験は、彼らの男らしさと同じように、彼らのセクシュアリティをも脅かすものである。なぜならそれほど男性のジェンダー・アイデンティティは、セクシュアリティに「頼っている」からである (1990, p. 211)。

参考文献

Allen, S., Bentley, S., and Bornat, J. (1977): *Work, Race and Imagination*. Univercity of Bradford, Bradford..

Ardener, S. ed. (1981): *Woman and Space: Ground Rules and Social Maps*. Croom Helm, London.

Brittan, A. (1989): *Masculinity and Power*. Basil Blackwell, Oxford.

Brod, H. ed. (1987): *The Making of Masculinities: The New Men's Studies*. Allen & Unwin, London.

Canaan, J. and Griffin, C. (1989): Men's studies: part of the problem,or part of the solution ?. *Network, BSA Newsletter* 43, pp. 8-9.

Castells, M. (1983): *The City and the Grassroots*. Edward Arnold, London.

Chapman, R. (1988): *The great pretender: variations on the new man theme*. In Chapman, R. and Rutherford, J. eds.: *Male Order*. Lawrence & Wishart, London, pp. 225-48.

Cliford, J. (1986): *Introduction: partial truths*. In Cliford, J. and Marcus, G. E. eds.: *Writing Cultures: the Poetics and Politics of Ethnography*. Univercity of California Press, Barkeley, CA, pp. 1-26. クリフォード, J.・マーカス, G. E.編, 春日直樹ほか訳 (1996):『文化を書く』紀伊國屋書店.

Cockborn, C. (1981): The material of male power. *Feminist Review* 9, pp. 41-58.

Cockborn, C. (1983): *Brothers: Male Dominance and Technological Change*. Pulto Press, London.

Cockborn, C. (1988): *Mascurinity, the Left and feminism*. In Chapman, R. and Rutherford, J. eds.: *Male Order*. Lawrence & Wishart, London, pp. 303-29.

Cocks, J. (1989): *The Oppositional Imagination: Feminism Critique and Political Theory*. Routledge, London.

Cohen, D. (1990): What a man's got to do. *New Statesman and Society* 8 June, pp. 30-2.

Connell, R. W. (1983): *Men's bodies*. In Connel, R. W. ed.: *Which Way Is Up?*. Essays on Class, Sex and Culture, George Allen & Unwin, Sydney, pp. 17-32.

Connell, R. W. (1987): *Gender and Power: Society, the Person and Sexual Politics*. Polity Press, Cambridge. コンネル, R. W.著, 森重雄ほか訳 (1993):『ジェンダーと権力:セクシュアリティの社会学』三交社.

Connerton, P. (1989): *How Societies Remember*. Cambridge

Univercity Press, Cambridge.

Cosgrove, D. and Jackson, P. (1987): New directions in cultural geography. *Area* 19, pp. 95-101.

Davidoff, L. (1973): *The Best Circles: Society, Etiquette and the Season*. Croom Helm, London.

Davidoff, L. and Hall, C. (1987): *Family Fortunes: Men and Women of the English Middle Class, 1780-1850*. Hutchinson, London.

Fevre, R. (1984): *Cheap Labor and Racial Discrimination*. Gower, Albershot.

Fitzsimmons, M. (1989): The matter of Nature. *Antipode* 21, pp. 106-20.

Giroy, P. (1989): Know what I mian, Harry?. *New Statesman and Society* April 7 pp. 24-5.

Hall, S. and Henderson, J. eds. (1977): *Resistance through Rituals*. Hutchinson, London.

Harvey, D. (1973): *Social Justice and the City*. Edward Arnold, London. ハーヴェイ, D.著, 竹内啓一・松本正美訳 (1980):『都市と社会的不平等』日本ブリタニカ.

Harvey, D. (1989): *The Condition of Postmodernity*. Basil Blackwell, Oxford.

Sayer, A. (1984): Editorial: Cultural studies and 'the economy, stupid'. *Environment and Planning D: Society and Space* 13, pp.507-27.

Hearn, J. (1987): *The Gender of Oppression: Men, Masculinity and the Critique of Marxism*. Whatsheaf, Brighton.

Hearn, J. and Morgan, D. (1989): Men: masculinity and social theory. *Network, BSA Newsletter* 43, pp. 6-7.

Jackson, P. (1989): *Maps of Meaning*. Unwin Hyman, London.

Jaggar, A. M. (1984): *Human biology in feminist theory: sexual equality reconsiderd*. In Gould, C. C. ed.: *Beyond Domination: New Perspective on Women and Philosophy*. Rowman & Allanheld, Totowa, N.J., pp. 21-42.

Johnson, L. C. (1989): Weaving workplace: sex race, and ethnicity in the Austoralian textile industry. *Environment and Planning A* 21, pp. 681-684.

Kapferer, B. (1987): *Legend of People, Myth of State: Violence, Intolerance and Political Culture in Sli Lanka and Australia*. Smithsonian Institution Press, WAshington DC and London.

Keighley, M. (1989): *A Fabric: the Story of Liter's*. James & James, London.

Lauria, M. and Knopp, L. (1985): Toward an analysis of the role of gay communities in the urban renaissance. *Urban Geogrphy* 6 pp. 152-69.

Lewis, P. (1985): Men on pedestals. *Ten. 8, Quarterly Photographic Magazine* 17, pp. 22-9.

Little, J., Peake, L and Richardson, P. eds. (1988): *Women in Cities: Gender and the Urban Environment*. Macmillan, London.

McDowell, L. and Massey, D. (1984): *A woman's place...* . In Massey, D. and Allen, J. eds.: *Geography Matters!*. Cambridge University Press, Manchester.

Mangan, J. A. and Walvin, J. eds. (1987): *Manliness and Morality: Middle-Class in Britain and America, 1800-1940*. Manchester University Press, Manchester.

Mass observation (1943): The Pub and the People, Victor Grollancz, London.

Mercer, K. and Julien, I. (1988): *Race, sexual politics and black masculinity: a dossier*. In Chapman, R. and Rutherford, J. eds.: *Male Order*. Lawrence & Wishart, London, pp. 97-164.

Metcalf, A. and Humphries, M. eds. (1980): *The Sexuality of Men*. Pluto Press, London.

Millett, K. (1977): *Sexual Politics*. Virago press, London.

Momsen, J. and Townsend, J. eds. (1987): *The Geography of Gender in Third World*. Hutchinson, London.

Moore, H. L. (1988): *Feminism and Anthropology*. Polity Press, Cambridge.

Mort, F. (1988): *Boy's own? Masculinity, style and popurar culture*. In Chapman, R. and Rutherford, J. eds.: *Male Order*. Lawrence & Wishart, London, pp. 193-24.

O'shaughnessy, M. (1985): Models of masculinity. *Ten. 8*, 17, pp. 9-15.

Phillips, A. (1990): Male models. *The Listener* 18 January, pp. 10-11.

Pleck, A. and Sawyer, J. eds. (1980): *Men and Masculinity*. Prentice-Hall, Englewood, NJ.

Pringle, R. (1988): *Secretaries Talk: Sexuality, Power, and Work*. Verso, London.

Rich, A. (1980): Compulsory heterosexuality and lesbian existence. *Signs* 5, pp. 631-60.

Rosaldo, M. Z. and Lamphere, L. eds. (1974): *Women Culture and Society*. Stanford Univercity Press, Stanford, CA.

Rose, G. and Ogborn, M. (1988): Feminism and historical geography. *Journal of Historical Geography* 14, pp. 405-409.

Said, E. (1979): *Orientalism*. Vintage Books, New York.

Saifullah Khan V. J. (1974): *Pakistani villagers in a British city*. Unpubl. ph.D. thesis, University of Bradford.

Segal, L. (1989): The best in man. *New Statesman & Society* 8 September, pp. 21-23.

Segal, L. (1990): *Slow Motion: Changing Masculinities, Changing Men*. Virago Press, London.

Seidler, V. (1989): *Rediscovering Masculinity: Reason, Language and Sexuality*. Routledge, London.

Smith, S. J. and Jackson, P. (1984): *Exploring Social Geography*. George Allen & Unwin, London. スミス, S. J.・ジャクソン, P. 著, 浜谷正人訳 (1991):『社会地理学の探検』大明堂.

Snodgrass, J. ed. (1977): *For Men Against Sexism: a Book of Readings*. Time Change Press, Albion, CA.

Soja, E. (1989): *Postmodern Geographies*. Verso, London.

Theweleit, K. (1987): *Male Fantasies, Vol. 1*. Polity Press, Cambridge.

Tolson, A. (1977): *The Limits of Masculinity*. Tavistock, London.

Valentine, G. (1989): The geography of women's fear. *Area* 21, pp.

385-390.

Ward, W. P. (1990): *Courtship, Love, and Marriadge in Nineteenth-Century Engrish Canada*. McGill-Queen's Univercity Press, Montreal & Kingston.

WGSG (1984): *Geography and Gender*. Hutchinson/Women & Geography Study Group of the IBG, London.

Williams, R. (1958): *Culture and Society, 1780-1950*. Chatto & Windus, London.

Willis, P. E. (1977): *Learning to Labour*. Gower, London.

Willis, P. E. (1979): *Shop-floor culture, masculinity and the wage form*. In Clarke, J., Critcher, C. and Johnson, R. eds.: Working-Class Culture, Hutchinson, London, pp. 185-198.

解題——あるいはこの場を借りた一試論（丹羽 弘一）

本稿の著者、Jackson はかつて、S. J. Smith との共著（Smith and Jackson, 1986）をはじめ、社会地理学とよばれる分野にいわば認識論的基盤を提供し、多くのモノグラフに影響を与えて続けてきた 1 人である。しかし 1989 年に出版された『*Maps of Meaning*』以降、彼の関心は 1994 年に創刊された雑誌『*Gender Place and Culture*』などをはじめとした媒体をつうじて、具体的空間に表われた社会的諸関係そのものから、むしろ様々な視覚的メディアを中心とした文化的表象に移行してきたと思われる。また、メンズ・ゲイおよびレズビアン研究者による業績の増大と平行し、彼の関心も、特にこの論稿に明らかにされている「男らしさ」の表象の分析に集中してきた。地理学というディシプリンにおける業績という観点から見れば、本稿はまさに先駆的という評価を与えられるべきものであり、そういう意味で良くも悪しくもその内容は多岐にわたっている。ここでは特に 2 点について指摘しておきたい。まず 1 点は先ほどにも少しふれたが、文化のポリティクスの強調と、「新しい男性」への言及も含んだ男らしさの文化的表象への注目である。本稿の前半部を占めるこれらの記述には、かつての 80 年代におけるフェミニスト地理学に見られたような男性主義あるいは家父長制を支えてきた、経済的および社会的諸関係への言及がほとんど見られない。だがこれは本稿に限ったことではない。かつて Andrew Sayer は『*Environment and Planning D: Society and Space*』における「Editorial」（1994）において「ラディカルな学術的文献のここ 10 年における最も目立った特徴の一つは経済から文化への移行であった」と述べている。また論調は変わるが、さらに的確な指摘を含み、このような移行をもたらしている困難を具体的に展開させたものとして「Nature, politics, and possibilities」と題された David Harvey と Donna Haraway のディベートとディスカッション（1995）があげられよう。これに先立つ「Editorial」において Neil Smith は左翼知識人の政治的な争いから学問的ディスコースの学者的ポリティクスの退却を指摘し、その原因として世界的な共産主義の破算をはじめとした、広範な政治的変化をあげている。おそらく Jackson ら社会地理学者、あるいは Gillian Rose らフェミニスト地理学者による最近の関心の移行も、このような全社会的変化と結びつけて語られるべきであろう。

私がここで指摘しておきたいもう 1 点は、この論稿の後半の主たる内容をなしている男らしさをめぐる、今後の社会地理学がなすべき課題にむけた提起に関することである。これらの提起は、およそ次の 2 点に集約されよう。その第 1 点は、男らしさの歴史的かつ地理学的に特有な形式の地図を描くことである。Jackson はその一例として、戦直後の Bradford の工場における、白人女性からパキスタン人男性への労働力転換の過程をあげている。そこではあるジェンダー化された特性（すばやい指先）の、人種化された男性への付与と、社会的に構築された男らしさとの関係が明らかにされる。またもう 1 点は、現代の性関係を支え、強化する空間構造の明示と、変化が可能な圧点の提示である。ここでは例えば労働の異なるコンテクストが、どの様に男性自身の意識に影響を与えるのかという問題。あるいは私的および公的空間と、異なった男らしさの様式などとの関係が探究される。これらの提起においては男らしさに関わる空間的諸関係に注目した、地理学的研究の方向性が確かに明確に提示されている。しかしながらこれらの記述は、前半における文化のポリティクス、あるいは男らしさの文化的表象に関わる議論と比べ、いささかその筆触の鈍さは否めない。またそれらの課題のもつむしろオーソドックスな認識論的枠組も、ともすれば良くも悪しくも社会地理学というディシプリンにかたくなにこだわりつづけようとする研究者たちの顰蹙を買いそうな、前半の文化研究に依拠した論調とのズレを感じさえもする。さらに Jackson 自身によるものも含め、彼のこのような提起を受けた、男らしさに関わる実証的な地理学的研究をいまだ私た

ちはみていない。このような男らしさをめぐる学問的状況、およびいま説明したようなこの論稿の、ある不安定な構成に表われているなにがしかの事柄について以下の論稿を加え、この解題ともつかぬ解題を締めくくることとする。

例えばJacksonによる本稿やJackson（1994）のような社会地理学者らの、そしてRose（1995）のようなフェミニスト地理学者らの、文化研究、特にメディア分析への傾倒をどううけとるべきなのだろうか。この問題については確かに先ほど述べたSayerあるいはSmithによる指摘とも関係させて語られねばならない。また「女性の存在を忘却し、男性の立場のみから、余すところなく調べつくそうとする」従来の地理学を「男性主義者」と規定するRose（1993）のラディカルな批判も念頭におくべきだろう。しかしむしろ私は先ほど述べたHarveyとの対話のなかでHarawayがあらわにした危機意識と、それに関するGregoryのコメント（ibid. pp. 519-520）のなかにこそ、このような学問的傾向のネガティブな解釈と、そしてそれを乗り越えるポジティブな方向性を与える何ものかがあると考えたい。Harawayは恐れる。私たちは「資本主義でない世界がどのようなものであるかという想像力をまったく失っている」という危機意識を共有するかもしれないのだ。しかし私が考えるには、研究者であれ活動家であれ、わかりやすくするためあえて意識的に不粋な言葉をつかえば、私たち左翼はこの危機意識を共有すべきなのではなかろうか。つまりHarvey（1973）の言葉を借りれば私たち「革命的」勢力は、「反革命的（あるいは現状維持的）」勢力に対し、レトリックの分野において、ほぼ完璧に敗北していることを前向きに認識する必要があるのだ（例えば最新のJ-popシーンにおけるヒット曲の、それがいかに思想的に空虚なものであれ、洗練されたビデオクリップがもたらす心象と、もはや伝統芸能ともよびたくなるような左翼活動家のアジテーションを比べてみていただきたい）。そこでGregoryは次のようなコメントを加える。「私たちがすでに持っている言葉の中にも、とても大切な財産がある。それらは詩的な言葉、政治的な動員においてもとりわけ重要だ」。「そのとおり！」Harawayはこたえる。「私たちの学問的な仕事を、一種のパフォーマンス・アートと考えるのも悪くない考え」なのではないだろうか。現在の文化地理学、そして文化研究の隆盛を担っている研究者たちが、どれほどこのようなビジョンを自らのものとしえているか、ここでは判断できない。しかし私たちも、私たちの実践に、なんらかの社会的有効性を期待しようとするならば、確かにこれも「悪くない考え」だと思われるのである。

最後に以上述べてきたようなレトリックの問題、およびRoseが指摘するような男性中心的な地理学の限界とも関連させて、男らしさの実証的な地理学的研究の困難さについて述べるつもりであった。しかしそこまで踏み込んで記述することは、不安定なアイデンティティしか持ちえていない今の私にはまだ荷が重すぎる。ただいくつかのてがかりと、戦略的な発想があるのみである。いつかかたちにする機会があることを信じ、ここではあえてふれない。ただかつて研究者としての男性の視点が持つ困難さについて、本論文にもふれつつ、極めて不十分ながら述べたことがあるので（丹羽, 1992）、興味をもたれた方は一読してみられたい。

文献

丹羽弘一（1992）：男性の視点は可能か.『地理』, pp. 78-80.

Harvey, D. (1973): *Social Justice and the City*. Edward Arnold, London. ハーヴェイ, D.著, 竹内啓一・松本正美訳（1980）：『都市と社会的不平等』日本ブリタニカ.

Harvey, D. and Haraway, D. (1995): Nature,politics, and possibilities: a debate and discussion with David Harvey and Donna Haraway,

Jackson, P. (1994): Black male: advertising and and the cultural politics of masculinity. *Gender, Place and Culture* 1, pp. 49-59.

Rose, G. (1993): *Feminism & Geography: the Limits of Geographical Knowledge*. Polity Press, Cambridge.

Rose, G. (1995): *Making space for the female subject of feminism: the spatial subversions of Holzer, Kulger and Sherman*. In Pile, S. and Thrift, N. eds.: *Mapping the Subject: Geographies of Cultural transformation*. Rotledge, London, pp. 332-54.

Sayer, A. (1994): Editorial: Cultural studies and 'the economy, stupid'. *Environment and Planning D: Society and Space* 12, pp.635-7.

Smith, N. (1995): Editorial: Trenspassing on the future. *Environment and Planning D: Society and Space* 13,

Smith, S. J. and Jackson, P. (1984): *Exploring Social Geography*. George Allen & Unwin, London. スミス, S. J.・ジャクソン, P.著, 浜谷正人訳（1991）：『社会地理学の探検』大明堂.